婦人と勞働

十月號

婦人と勞働（十月號目次）

婦人と勞働



第二卷　第六號

豚になる事を怖れませう
飢ゑて野をさまよふ犬にならうとも、またよし、狼に追はれる羊にならうとも、彼等の豚となる事を怖れませう。
豚の前に汝等の眞珠を投げ與ふる勿れと
尊い人が云はれましたが
豚でもないわたし達に
況してや眞珠がはりの金貨や三越を投げようとする
異教徒の紳士達に氣をつけませう。
彼等の妻妾となる事を只管に怖れませう。
素足に畑の土を蹴りつゝ
駈け寄つてわたしを抱く男のためには
わたしは忽ち花となり
また直ぐ散つてにほひとなり涙ともなつて上げませう。
ひとしづくの乙女の露を貴方のひたひに捧げませう。

（平山すみ子）



認められぬ婦人の働き

奥むめを

男女は分業をしてゐるのである

今日でこそ、男子は單に男子であるといふ事のためにつねに、家庭に於ても、社會に於ても、優越した性として女子を支配し、女子を隷從させてをりますけれ共、大昔は、男子と女子との地位に、上下の差別は決してなかつたと傳へられてをります。男子が外に出て獸を追ひ、魚を漁つてゐる間に、女は、家に居て、農作に從事したり、料理をしたり、子供の世話をしたりし乍ら家事にいそしんでゐて、而も、お互ひはたゞ違つた仕事の分け前を持つて働いてゐるといふ事だけで、その間に、權利上の差別もなく、地位の高下もなく、全く平等な地位に在つたといふのであります。その、男女が全く對等であつた時代から、今日のこの甚だしい男尊女卑時代にまで移り變つて來る間には、勿論幾多の社會的、經濟的の變遷を經て來たものでありますが、育兒、料理、その外いろんな家事にいそしんでゐるといふ點に於ては、今日も、大昔男女の地位が全く平等であつたといふ當時も、女子のはたらきには量、質共に相違を見出しがたいにも拘らず、その社會的地位の懸隔の甚しさはどうでせう。

二

今日では、男女は、單に性別に依る分業的な立場の相違をもつだけではなくて、むしろ階級的な相違を以て、一方は隷屬し、他は支配しつゝ、この變態的な社會を形成してゐるといふべきであります。丁度、勞働者の生產的な勞働が尊重されず。その勞働は僅かにその日〳〵の糊口の足しになる位の賃銀に換算されるだけで、つねに社會的に卑しめられてゐると同じやうに、女子の妻たり、母たる仕事も、一向社會的にその價値を顧みられずして、僅かに男子に依存して——そして、その報酬は今日の、この奴隷的な女子の地位であります——衣食を得てゐるといふ狀態であります。

女子の働きは何故價値づけられぬか

女子の仕事が何故卑められてゐるのであらうか。

それに就いて、考へられることは、今日のこの社會は、資本主義の社會、金子萬能の世の中であるといふ事であります。今の世の中で權力をもち、尊敬される者は、力の勝れたものでもなく、知識高い人でもなく、優れた才能をもつ者でもなく、美しい人でもなく、たゞ莫大な金子を擁してゐる人、又、その働きが多くの金子になる人たちに外ならぬのであります。女子の家庭的な勞務が卑しめられてゐるといふ半面には、家庭に於ける女子の働きが一錢の金子にもならないといふ事實があることを、私たちは見逃すことが出來ません。女子が家庭に在つて一日中、非常に煩鎖で、而も盡きる事なく次々に續く、疲れ易い家庭的勞務におはれてゐても、その仕事は少しも價値づけられず、與へられるところのものはたゞ、疲勞と、不自由と、依存者としての屈辱と、この上になほ附加へられるものがあつたら、それは窮乏より外にはないに違いありません。

それに反して、もし家を外にして何等かの職業に就くならば、たとえ十圓でも、二十圓でも、とにかくそ

のはたらきに對する報酬が戻つて來て、それに伴ふ自由を樂しむ事も出來るのであります。
種族の母として、女子が次の時代に對して持つ責任は非常に重大なものであるにも拘らず、この金子萬能の世の中では、その働きが價値づけられないために、貧しい者は生活難から、さうでない者は、女子の經濟的獨立といふ美名にあこがれて、金子では買へない、尊い、女として、母としての、子に對し、家に對し、又社會に對する心づくしを犧牲に供して、僅かに十圓二十圓の金子をうるために、又はその金子が持つところの自由をうるために、家を外にして働かうとする者が激增しつゝあるのであります。
私たちの母性としてのはたらきが、誇りのかげに不安を、悅びのうらに窮乏を、そして屈辱を與へてゐるやうな事で、どうして私たちが安心して、喜んで、そして十分にその女性的本能を生かしてゆくことが出來ませう。

默々の內になしとげて來た婦人の働き

まことに、今の世の中は金子の世の中で、すべて物の價値を量るのに金子を持つてしてをります。五圓の働きをする人と十圓の働きをする人とがあれば、十圓の働きをする人が、五圓の働きをする人よりもずつと尊敬されるのであります。何にも働かなくて、而もなほ、何萬何十萬といふ大金を懷ろにしてゐる人ならば、最も尊敬されて地位、權力、あらゆる榮譽がその人に集るのであります。社會のために有用な仕事をしてゐるか、無用な——乃至有害な仕事をしてゐるかといふ差別も、この金子を以てする量り方の標準には決してなつてをりません。次の時代を作り、そしてこれに生命を與へるといふ、社會的にみて最も意識深い女の仕事も、今日のやうな金子の世の中では、貨幣價値に少しも換算されないのですから、やむをえない事では

ありますまいか。

然し、人々は、女子がかうした立場に置かれ乍らも、貨幣價値には量られない、而も世の中にとつて極めて重要な仕事を、默々の內になしとげて來たといふこの事實を、たゞ、それが貨幣價値ではかられないために多くの場合忘れ勝ちであつたのであります。

近頃になつて、母性の尊重とか、女子教育の必要とかいふやうな事が、所謂世の中の人の聲として叫ばれて來ましたが、全てのものが貨幣價値に依つて量られる現代といふ市場に於て、單なるさうした叫びは、結局現實の女性の生活をどうすることも出來ない不渡手形の濫發にすぎないと思ひます。

金子ではない新しい價値の發見

然しそれは、金子で量られないやうな新しい價値の發見でなければなりません。

實に今の世の中で最も大きな間違ひは、この、全て人のはたらきが金子で買はれ、金子で賣られるといふ事であります。この金子が、全てのものの價値を定める尺度をなしてゐるといふ事であります。で從來、そのはたらきの價値を忘れられ勝ちであつた女性としての私たちは、特にさういふ金子ではない、新しい價値に生きるやうな社會を招來するために、一層餘計に努めるべき責務を負ふてゐると云はねばなりません。



家庭に於ける婦人勞働に就いて

田中義郎

一

産業革命以後生産手段の異常なる進歩發展を見るに及んで、勞働者が單なる機械の番人となつてしまつてから、凡ゆる産業部門に於いて、婦人勞働者や幼年勞働者が、成年勞働者に對立して重要なる役割を演ずるやうになつたが、一方家庭に於ける婦人勞働の問題も、今や重要なる社會問題として認められるやうになつた。

家庭に於ける婦人勞働の問題は、普通二つの立場から見る事が出來る。一は女中乃至家政婦のような被傭勞働者の立場からであり、二は家婦又は子女のような家族勞働者の立場からである。併し、我々が勞働問題で扱ふ所は被傭勞働者を對照とするのであるから、私は玆には、家庭に於ける婦人被傭勞働者の問題に就いて少しく考へて見るつもりである。今日到る處の勞働市場で多數の失業婦人求職婦人を見ながら、各方面より女中拂底の聲を聞くのは何故であらうか。

生きる爲には、勞働をして生活資料を得る外には何の手段も方法もない近代の無産者は、勞働の需要ある所には、工場であれ、家庭であれ、どこへでも自分の勞働力を賣込まなければならないのである。然も家庭勞働は、マーガレツト、ボンドフイールドの言葉を借りて云へば「家庭をして、これに從事す

る勞働者の社會的地位が、他の如何なる勞働部門のそれとも同等であるように、立派に統整された産業たらしめ、人間の精力が人間の欲望を滿たす爲に保存せられるような産業たらしめ、そして眞に我々の家庭を安息と休養の場所たらしめんが爲に、料理、洗濯等の仕事は立派な、又必要な勞働であるのである」たとへ有閑階級が、贅澤と虛榮と懶怠との爲に家庭勞働者を要求するとしても、それは、今日有産階級の獨占的欲望を滿たすにすぎないところの贅澤品製造場に勞働が要求されてゐるのと同じ意味である。

それにも拘はらず失業婦人が、家庭勞働の部門に向つて殺到しないのは何故であらうか。

二

それは云ふまでもなく、今日の女中生活の勞働條件が、自由な工場勞働に比すれば、全然昔の儘であつて、一向、出來るだけ時間と勞力とを少なくして最上の成績を收めるように調整すると云ふ試みが爲されて居ない事を、最早被傭者が充分意識して居るからである。

私は念の爲に、一應今日の女中生活の有りの儘を見るであらう。第一に失業婦人が家庭勞働を忌避する原因は、給料の安い事と勞働時間の長い事である。では、何程の給料が彼等に支拂はれて居るかと云へば、二十歲前後の普通婦人で一ヶ月十五圓內外（東京、橫濱の相場）といふところである。飛切り上給の二十圓と云ふような場合には、家族十人內外といふ事を注意しなければならない。甚だしいのに至つては、十數人の家族にして女中の給料七八圓といふのさえもあるのである。若しそれ子守女に至つては、月給五圓前後が普通である。それで彼等は家族の起き上がる前に起き、家族の就床後寢るのであるから、朝五時の夜十時として、勞働時間實に十七時間である。

或ひは、家庭勞働者は工場勞働のように、或る作業を繼續して行ふものではないのであるから、たとへ其の勤務時間が十七時間であらうとも、工場の場合と同樣に見る事は不當であると云ふ人があるかも知れないが、それは皮相の觀察であると云はなければならない。今日日本の家庭に於いては、女中の爲に一日中二時間なり三時間なりの、全く自由なる時間を與へて居る事は殆ど聞かないところである。若し終日十七時間なり、十五時間なりを、雇ひ主の爲に何等かの用を辨ずるとするならば、明かに肉體的及び情神的の勞力提供ではないか。尙工場勞働者は、終業後は雇ひ主の監視より逃れて、全く自由な時間を有するのに反して、家庭勞働者は、終業後も、僅かに入浴と就眠の時間を有するだけである。その上工場勞働に比して家庭勞働は、不規律で、無組織で、而も雇ひ主は大抵暴君でありヒステリーである。

それ故、一度家庭勞働より遙かに自由な工場生活又はその他の經驗を有する失業婦人は、女中といふ響の上に非常に地位の卑しさを感ずるのである。最近東京の職業紹介所に現はれたる統計に依れば、需要者百人に對して、供給は僅かに三人乃至五人といふ事である。如何に家庭勞働が忌避されてゐるかゞ解るではないか。

三

そこで、舊套依然として奴隷的な勞働を女中の上に要求する雇ひ主に對して、最早これまでのやうに柔順な、そして非常に安價な勞働を提供するものが無いとすれば、劣惡なその勞働條件を改善する事に依つて、この産業部門内に於ける需要と供給の調節を圖るより外に道がない事は云ふまでもない。

それに就いて最も急を要する改善は、住込を雇傭條件とする事の廢止と、勞働時間の短縮と、他の勞働部門に於ける賃金率と同等の賃金制の確立であ

る。仕込といふ事は全く被傭者の自由を束縛するものであり、彼等を奴隷狀態に置くものである。從つて、被傭者の自由と獨立を最もよく保護するものは通勤制度であるが、若し、現在の日本の家庭事情では、今直ちに仕込を廢する事が出來ないならば、被傭者は一日の內幾らかの充分に自由なる時間を有つべきである。この時間には、彼等は自分の仕事を他から妨害されないといふ權利を尊重されなければならない。そして其の勞働時間は、一日を通じて他の勞働部門のそれに準ずべきである。この場合注意しなければならない事は食料と宿泊料は、外部のそれと比較して定められたる金額を被傭者の賃金の內から支拂ふといふ方法を取る事である。

賃金制に就いても、從來の物品給金制——お仕着制度——は絕體に廢しなければならない。物品給金制の下では、不正な利得が貪られてゐるといふ疑を招くからである。そして賃金支拂は、少くも一ケ月二回が至當であり、公休日も二回はなければならない。以上三項が實行されるとき、家庭勞働者の前には初めて黎明の光が輝くであらう。マーガレット、ボンドフイルドも「若し相互奉仕と平等の地位といふ正當な關係が結ばれさえすれば、其處に數發ある婦人の大集團に對して價値ある職業が提供される事となるのである」といふてゐる。

今度萬世橋の東京府職業紹介所では、女中拂底問題の對策として、家庭雇ひ人に關する家庭勞働事情改善の方法、向上策、訓練方法その他について、大々的に調査をすることになり、先づ其の方法として、同紹介所內に一の調査委員會を設け、斯うした問題に理解ある婦人を初め、雇ひ主、雇ひ人、官吏、學者、實業家等を委員に囑託する事になつたといふ事である。(東京日日新聞に依る)私はこの委員會に期待するものではないが、家庭に於ける婦人勞働問題が日本に於いても如何に切實の問題であるかゞ解ると思ふ

(一三——八——二七)

最近の感想

戰爭は恐しい

神林文子

八月下旬から新聞紙を賑はし初めたのは、支那の動亂である。

ある人はまた始まつた、といふであらう。或る人は、支那の國際管理とか何とか、體のいゝ侵略を說くであらう。又他の人は、今度の兵亂に就いて列國の干渉を勸めるであらう。それもいゝ。みんな云ふだけ云はせてみるのもいゝであらう。然し、私たちには外に考へることがある。

それは外でもない。凡そ戰爭といふものは、人民――その九分九厘までが無產階級に屬する――に、非常に大きな禍を齎すところの、どんなに不合理なものであるかといふ事に就いてである。幾ら支那式の戰爭だから、鐵砲は靑天井を向けてズドンと打つ放つし、給料次第で平氣で寢返りを打つて、昨日の敵に今日は味方をしたりするものだとは云つても、戰爭そのものは、常に無辜の人民の上に大きな災害を雨降らすものである。個人的に何等あづかり知るところのない戰爭が突發して、直隸派、反直隸派の勢力消長のために澤山の人身が破壞されるといふことは、あり得べからざることである。

殺人――强奪――破壞――それが戰爭の全部なのである。

翻つて、非戰熱、平和運動の如何に根底淺く、貧弱なものであるかを思へ。平生熱心な非戰論者も、戰雲一度び動くと、たちまち帝國主義、軍國主義の傀儡となつて、戰ふこと、勝つて敵を亡ぼすことに蹶起となるのである。

平和！ 平和！ 永久の平和は一體いつになつたら來るのであらう。われ等の往む地上より、この恐しい戰禍を取除くために、われ等は先づ、戰爭は何故起るのかと考へてみやうではないか。

何故、今の世の中に、命を的にしての慘酷な戰ひといふものがあるのであらうか。

目覺め行く現代婦人

岡部のぶ子

服從は絕對であり、追從は妥協である。只、言葉の上に於て少しの違ひを見るのみであつて、其の根底に於ては、服從も追從も同一なるものである。

前者は最も意志の弱きものであり、後者は最も臆病なものである。此れを婦人の上に及ぼして見るなれば、現代の多くの婦人は、此の兩者の中の、いづれかに屬すべきものである。自已獨自の最も尊ぶべき本性を生かして行く事が出來ずに、唯だ男子に服從し、追從して行くに過ぎないのである。近世資本主義經濟の產業組織に於て、勞働者を奴隷とすると同じく、男子の專制が、婦人に其の奴隷的屈辱を强要するのである。其處に於てか「弱きものよ、汝の

名は女なり」と云ふ如きくだらない、迷言が生れたのである。或人は、古來の因襲的道德より來つた處の貞女貞節の如きを婦人に望み、或ひは强要し、男子の放從を默認するが如き片手落の變則道德を持つのである。そうした社會の習慣になれ、其れに耽溺して、婦人自らの個性を沒却し目覺める事を知らなかつたのである。

然しながら社會はさう何時迄も眠つて居ず、常に時代は進んでゐる。そして社會の進むに從つて、人類の文化が發達し、其の影響を受けた婦人は、又人として本性に目覺ざめんとしてゐる。

斯くして新しく生れ出る婦人は、人間性に目覺め自己其の者の本性を見つめつゝ、一歩〳〵男子よりの解放を遂げやうとして居るのである。蹂躙せられた、過去の婦人の領分を、特に女性としての獨特の立場を取り戻し、人類解放の先驅者となり、社會改造の急先峰たらんと奮鬪しつゝあるのである。

職業婦人の目標

多田光子

過古十年間に、婦人問題特に職業婦人問題は各國に於て盛んに論議されるやうになりました。昔は、一家を支へてゐるのは男子で、婦人は一家の主婦として、子供の監督者として、家庭に於て働いてゐたのであります。

然し今日の如く資本主義の發達につれて、夫に支

給される賃銀だけでは一家を支へるに不充分になりました。そこで婦人は、工場の門をたゝいて賃銀を得る道を開きました。こうして無産階級の婦人は、年々工場、銀行、商店等に送られ、女工や、事務員として働く者が多數になつて來たのであります。

世界戰爭前に造つた統計によれば、歐州諸國及米國には三千萬の職業婦人が賃銀勞働者として働いてゐました。戰爭後此數は著しく增加しました。我國に於ても、現在では、數十萬の婦人が商工業方面に働いてゐます。これらの婦人は、一日どうしても十時間乃至十四時間は働かねばなりません。こうして朝は暗い中から、夜おそく迄戶外で勞働しなければならないので、自然、家庭はおろそかになり、彼等の子供は家に殘され、母の監督もなく、道ばたであらゆる危險に相遇しつゝ成長するのであります。

それゆゑ、現今の無產婦人は、主婦として、母として、勞働者として、同時に三つの仕事に汗水流してゐるわけであります。言換ふれば、婦人は商工業機關の下に於ては、夫と同時間勞働し、家族に對しても全力を注ぎ、尙子供の監督もしなければならぬ。即ち、資本主義社會は、職業婦人を蹂躪する三つの重荷を負はせてゐるのであります。以前は母が兒童の監督をする事は彼女の運命であると云はれてゐたものです。然し、今日の如く、資本主義の鐵鎖に束縛されてゐる職業婦人の運命は、最も悲慘であります。このやうに、今日の社會制度は婦人を奴隷とし、虐使し、骨拔きにして、遂に暗黑な社會のどん底に呻吟させるのであります。そこで私共職業婦人の眞の解放は、單なる政治運動や、賣名的廢娼運動によつてされるものではなく、之等の原因をなす社會制度そのものゝ根本改造によつてのみなし得るのであります。婦人が操を財物に代へて賣るが如きことなく、婦人としての任務を十二分に遂行し得るやうな新しい社會を建設する爲に、私共は團結して、一致協力したいと思ひます。

女性を歌ふ

井上康文

歌麿の薄衣をぬぎすて、
春信の髪を束ねて、
文化と近代思想に生きる女性、
あらゆる母體である女性、
尊敬と愛慕と慰撫の焦點、
愛すべきモナ・リザよ、
美しきマリアよ、
それらの何れでもあるべき女性よ、
私はおんみに限りなき讃美の言葉をおくる。

私は現代の女性を愛する、
私は人生の先驅者であるところの、
優しき母性を愛する、
ああ、しかし、そこに星のごとき、
草の葉の露のごとき、
美しき涙を失つた女性の、

寂しき生涯を考へる。

女性よ、私の愛すべき女性よ、
おんみの活動の、大きな努力を、
人生への偉大なる勞苦を、
日に夜に働きつゞけるそのムーヴメントを、
私はどんなに感謝することか、
しかも私は呪はしく、また限りない憎惡を、
おんみの上にもたなければならない、
女性よ、私の愛すべきをんなよ。

おんみに靜かなるひと時ぞあれ、
おんみの愛すべきものを、
心から愛する熱情のときぞあれ、
おんみは深夜の街上に、暗き小路に、
眠らぬわが子に子守唄をうたひ、
夜をとほしてその子を慈しむ母であれ、
寂しく、疲れはてて、おんみの抱擁と、
熱き口吻を求めてゐる夫に、
その絶大な愛を與へる妻であれ。

おゝ、女性よ、

現代の思想は、藝術は、
おんみに自由と解放を與へる、
しかもその自由と解放の、
如何に誤られてゐることよ、
おんみのスタヂオは會社の卓の上、
ビルディングの窓の中ばかりでない、
おんみの運動（ムーヴメント）は街上にばかりでない、
おんみが愛する者を愛し、
慈しむものを慈しむ心、
そこに偉大な革命があることを。

おお、愛すべきわが女よ、
おんみの魂に光り輝くものは、
おんみの生くべき唯一のものは何か。

——一九二四・九・十九——



母性の惱み

神近市子

昔は男子は婦人の附屬物であつたと、いふことを生物學上から唱へてゐる、女性中心說と云ふ學說もあるにはありますが、然し乍らあの學說はその他の多くの考證的學說と同じく、その眞個の存在の意味は、現在の男性中心の社會現象に對してその男性萬能の迷蒙を破つた點にあるものと考へられるところがあります。もと〲、婦人は婦人として獨立した存在のみでは幸福であり得ず、また男子は男子として獨立した存在のみでは幸福ではあり得ないのであります。そしてこの理由から、婦人の男子支配と云ふことも男子の婦人支配と云ふことも、共に等しく男子にも婦人にも幸福なものではないと云ふことが云へるのであります。婦人の幸福は男子を對象として成立し、男子の幸福は婦人を對象として成立つのですから、お互の幸福の爲めにはお互に平等であると云ふことを原則としなくてはなりません。この點から申しますと、女性中心の文化といふやうなものがかりに實現されたとしても、それは恐らく女性にとつても男性にとつても、決して幸福とはなり得ないものでないかと考へられます。

勿論、全社會の經濟的平等が確立され、男女平等の精神が人類の知性の中に浸潤して新しい社會が生れた

なら、そこには平和と人類愛とを基調とする文化が出現するかも知れません。そして婦人はそうした文化を建設する爲めには、かなり努力してゐる傾向を認めることが出來るのであります。かの歐洲戰爭當時、メーデーのデモンストレーションに、リプクネヒトの野外演說があつた後、間もなく、獨逸國内に於いて婦人の非戰運動が熾烈を極めたやうに、また、さきごろホーム・ジアーナル誌に、フリーマン・チルデン氏の報告として歐米諸國に散在する全世界婦人聯盟が、それが如何なる內容のものにもせよ、皆ひとしく戰爭防止の爲めに努力してゐることが記述されてゐるものがあるやうに、婦人は平和と人類愛との爲めにかなりの努力を爲してゐるのであります。それでその種の文化を從來の好戰的な文化に對して、かりに女性を中心とする文化であると見做すなら、それはまさしく招來されなければならないもの、招來すべきものであると云ふやうに何人にも考へられると云ふことは、これは少しも異議のないところであらうと思はれます。そしてその種の文化の中でこそ、新しき母性は自己の安住する住家を見出すのでございます。然し乍ら、今日の狀態は、どの點から見ても、新しき母性は苦惱の時代に逢着してゐると云ふ可き、幾多の理由があることを私共は見るのでございます。

獨立の精神に鼓舞されて兩親や良人から經濟的に獨立して行くものと、常により安い賃銀の勞働者を要求してゐる資本家の爲めに家庭から狩り立てられるものとの爲めに、種々の職業婦人が增加しつゝあると云ふことはこれは世界一般の現象でございます。特にこの現象は歐洲の大戰後は著しく增加する傾向を示してゐるのであります。これは、畢竟婦人の經濟的獨立を意味するものであり、男子と平等の立場を獲得しようとする努力の喜ぶべき現象を物語つてゐるものでございます。然しその婦人達が更に

進んで新しき母性を形づくるに至る迄には、その徑路に尙ほ幾多の困難が橫はつてゐるのでございます。婦人の母性としての仕事は、非常に困難な非常に苦痛多きものである丈けに、婦人にとつては實に重い負擔であつて、曾つては獨立した職業婦人すら、母となるや多くはその職業をはなれ、再び生計の爲めに何人かに依賴しなくてはならない狀態に陷るものでございます。これは母性としての意義と價値とが社會的に何ら認められてゐない爲めに、そして産褥にある間、また育兒に要さるゝ時期の間、社會から何物をもつても酬ひられない爲めに、子を生み且つこれを育てるといふことが、物質上非常な難事になるが爲めであります。從つて曾ては經濟的獨立を企てゝゐた婦人でさへ、充分な自覺と決心とを持たないことには、再びまた以前の屈從的の生活に這入つて行かなければなりません。それは一部の人々が衣食住を獨占してゐる爲めであるとは云へ、一般の新しい母性にとつて重大な難關であると云ふ事實は、これは爭ふことが出來ないのでございます。

しかし乍ら、今日新しき母性は經濟的には又再び以前の獨立のない境遇に陷り、古い母性に酷似した生活の外形をとることを餘儀なくされてゐるかも知れませんが、その自覺には全然舊來の母性のそれとは非常に異つたものを持つやうになつてゐることも亦事實でございます。現代の社會は、資本主義の社會でございます。この社會では、資本家を益する勞働のみが酬はれてゐること、男子の事業と勤務とはこの目的を果してゐる爲めに皆その報酬を得てゐるが、婦人の分娩、育兒等の勞働は社會的には尊い價値ある事業であることは事實であるも、直接資本家を益するものではないから何等の報ひられるところもないこと、然し次の新しい社會の生命を與へるものは自分達に與へられてゐる母性であると云ふこと、これらの事實を、今新しき婦人達は徐々と、然

し乍ら確實に自覺しつゝあるのであります。そしてこれらの自覺を得た婦人は、いかに多くの困難に當面するも、決して再び古い母性に還り行くと云ふことはあるものではございません。

かうして新しき母性としての婦人の自覺は確立されはしましたが、その自覺に伴ふ苦の經濟的條件は、また依然として不可能であることを事實によつて示して居ります。この矛盾は、今凡ての新しき母性が經驗しつゝあるものでございます。そしてこの自覺と實際との矛盾の中で、新しき母性は嘗つて兩親や良人から獨立した以上の努力を必要とする、新しい苦惱に當面せざるを得ないのでありまして、この點が現代が新しき母性にとつて苦惱の時代であると云ふ所以でございます。

この苦惱は、それが廣く一般的のものであり同時に致命的なものである丈けに、新しき母性に對する影響の甚しいことも事實であります。それは彼女を時に陰鬱に、時に自暴自棄の狀態に陷れ、彼女の生氣を奪ひ、その創造的精神を磨滅させてゐることすら、僅少でないやうに觀察されます。然し乍ら、心から惱む者が救はれる日があることは實際である如く、新しき母性もその苦痛に直面し、その苦惱を心に判然りとつかんで行く限り、母性解放の時代が到來することは深く信じて疑はないものであります。

勞働部て『跡』と『募金券』の發行

聯合婦人會勞働部のテウトリアルクラスは熱心な女子聽講者が豫想外に多いので講師の藤井氏も欣んでゐられる。かうした眞劍な人たちが中心になつて働いて行つたら、婦人勞働運動の前途も案外容易に開けてゆくに違いない。

今度『跡』『募金券』を發行して、主義や主張を宣傳し、併せて資金募集をやつて積極的活動に入らうといふ事になつた。『跡』は十月一日頃に發行される小册子である。『募金券』は、小額寄附金の受領證と云つた風のもので、一册分で二圓、五錢宛の受領證が四〇枚綴ぢられたものである。誰でも、この仕事に援助してほしい。

とかく女の仕事は第一金子がなく、第二人がなくて行惱みになる場合が非常に多い。もう時代は余程動いてゐる。愚圖々々してゐると、時代の方でおいてけぼりにして行つしまひさうだ。

次に來るべき新しい社會では、女もまた社會の半數を始める大事な要素となつて、社會萬般の事に意見を加へ、力を協せて働くだけの力を持たなくてはならぬ。もう女も、社會的に動いて來なくてはならぬ時が來てゐる。

申込所　東京市外大久保百人町
聯合婦人會勞働部

職業婦人と貞操問題

梅山一郎

▲職業婦人墮落の聲の眞相

警視廳の御役人達は、不良少年少女の、所謂、軟派事件に出て來る大部分の女性が、事務員だ、店員だ、タイピストだと云ふ實例に眼を白くして、『職業婦人が貞操を輕んずる事斯くの如きとすれば、由々しき大事だ』と叫んでゐる。少年審判所の兒童保護司達も、取扱ふ問題の內に、男を挑んだ女の多いのを見て、『婦人の解放はこゝまで女を放縱にして仕舞ふたのか』と、慨歎し、職業婦人紹介所でも、大膽な女が殖えて來るのに驚かされてゐる。かう云つた事實から、新聞や雜誌々筆を揃へて『職業婦人の貞操危期に迫る』と、少し大袈裟に書き立てる。世間でも皆さう思ふてゐるやうだ。然し眞面目な立場から、今職業婦人が、斯くの如く墮落してゐる事を、事實として是認してよいか何うか？

それには、ずつと深く、彼の女等の生活の內部に喰ひ入つて見なければならぬ。それは到底能はぬ事だが、高級な職業婦人の代表者の如く思はれてゐる丸の內界隈のお勤め婦人が、眉を描き、頰を紅で叩き、唇を染め、髮を縮らして、帶を脊負ひ上げた姿が、大家の令孃と見まがう程の華美な服裝であること、彼女等の生活が所謂大跨歩きに代表される遠慮なしに、自由に語り、自由に飛びめぐつて、少しも拘束なしである事、勤めが退けて薄闇が迫る頃、男

と連れ立つて何處かに消え去る女を目撃する事の多い事等を綜合して來ると、職業婦人墮落の聲は、寧ろ少數の眞面目な婦人を除いては、事實に思はるゝ外的現象が多い、英米の職業婦人が辿つた暗い道を、今日本の職業婦人が通りつゝあるのだと思へば、先づ間違ひなからう。

▲經濟の關係か性の關係か

所がこの職業婦人が貞操を捨てる理由として、世間では二つを擧げてゐる。その二つは、婦人の得る收入が尠ないのに、生活費がそれ以上に嵩まるからだと云ふ。自分が取つた丈の金で質素な眞似をしやうと思ふても周圍の人が許さぬ。第一就職の場合でも、タイプのスピードよりは、容貌の良し惡しが、タイピスト採用の標準になるではないか。採用されてからも、人の眼に立つ程の派手な着物をき飾つてゐた方が、上の人の覺えも目出度く、氣に入られて昇級が早いではないかと、言はれても、辨解出來ぬ

程、職業婦人は實用よりも裝飾的に見られ勝ちな點もある位で、收入よりも、餘計金がかゝると云ふのも不思議はない。この結果、あらぬ男に身をまかしたりすると云ふ事實も、幾多の實例で首肯される。もう一つの理由は、近年婦人の解放氣分と共に、獨立と自由を夢見て巢立つた職業婦人であるから、しばられた家族制度の戸主權の恐ろしき事等は既に認めず、自分が働らいて自分で食べて行く以上、家に出るも入るも自由で、昔よりは時も金もいろ／＼な都合がついて來たから、彼女等の押し込められてゐた壓迫の反動が、先づ性の解放に現はれて來たといふ事である。近代の個人的な戀愛至上、戀愛自由、結婚自由、もう一つ男女の自由交際と云ふ樣な自由づくめの輿論の波にのつて、どし／＼大海原へ出て來たといふ鹽梅だ。あやまち易い此等の思想の美名に驅られて、未だ人生の處女航海者たる彼女等が、性の亂舞に醉ふに至つたと云ふ事も、幾多の事實で首肯

される。

世の議論をする者の内で、職業婦人の貞操の墮落の原因の主體を、前者の經濟問題に置く者と、後者の性問題に置くものとの二者があるやうだが、私は何れを主副とせず、共に合して今日の墮落の半ば宛を形成してゐると云ふ見方の下に、特に、經濟關係の墮落原因に就て、最近調査した二三の統計から斷案を下して見やうと思ふ。

▲この職業婦人の消費高を見よ

私は職業婦人をその收入の使ひ途から三つに分けた。

(一)は收入の半ばを家庭の生計補助につぎ込む者。

(二)は衣食住悉くが親の世話になつてゐて、收入を全部自由に使ひ得られる者。

(三)は自己の收入を以つて衣食住する者である。

東京市が最近調査した二三年勤續した交換手、タイピスト、看護婦、女店員、女事務員、小學校女敎員六種類の平均收入は、雜收を入れて、四十二圓强になるから、この收入高で例を取つて見ると、第一は二十圓家へ入れて、二十二圓自分で使ひ、第二は四十二圓を悉く自由に用ひ、第三はこの四十二圓で衣食住全部をやつてゆかねばならぬと云ふ事になる。幸ひ日本では、第三の種類に屬する職業婦人は未だ一般に尠ないので、問題にならぬが、これが多くなると止むを得ずして誘惑さるゝ率は多くなる許りである。順序として職業婦人の生計費を調べて見るのに、間代は東京市の貸間係の標準では、疊一疊で最高二圓五十錢、最低二圓、平均二圓三十錢前後である。一人四疊半に住むとしても、十圓三十五錢六疊を二人で貸りても、約七圓はかゝる。次に食代の標準は、朝飯三十錢、晝飯二十錢、夕飯三十錢で、一日八十錢、一ヶ月二十四圓である。これは素人下宿の事で、下宿ならばもつと高い。人間の生活費の内では、食費が一番多いのが原則であるが、近代の

都會婦人が、お洒落代に費す費用の大きいのには驚かされる。或る美容大家は、女が一ヶ月どの位の化粧品を費すかを調べた結果、女中の階級でさへ、一ヶ月に約三圓の化粧品が要ることが判つた。內譯して見ると、

▲髮油　五十錢　▲石鹼　三十錢　▲染粉　二十錢　乃至四十錢　▲髮洗粉　八錢　▲化粧品　三十六錢　▲白粉固練　八十錢　▲粉白粉　三十錢　▲紅二十五錢

等で、之が朝化粧夕化粧をするお洒落女になるとこの外に香水、色白粉、特種のクリーム等いろんなものが入つて來るので、最高八圓九十錢と出た。この平均を六圓とすると、尠なくとも丸ビル出入りの白い職業婦人の一ヶ月の化粧品代は、六圓は下らぬ。その外に金目の嵩まるのは、一週一度の美顏術料が、一回一圓で、一ヶ月四回四圓、美顏術師に頭髮を結はせる者は、一回一圓で、月に一寸奇麗に結び上げて置くには十圓內外の金を拂はねばならぬ。かうつけ加へると、實にお洒落代こそ莫迦にならぬ一ヶ月二十圓もかゝる譯である。この外に電車代が四圓五十錢。以上衣物をぬきにした消費高の總計は、五十五圓五十錢になる。しかも婦人の美を支配する着物、其の他の小使は一文も計算してない。そこで、前に上げた第三の獨立の婦人でお洒落を充分して行けば、衣物を着ないで未だ月十五圓も足らぬ。第一の、半分月給を貰ふ婦人でも、少し洒落れ出すと電車賃と化粧代で飛んで仕舞ふ。第二の境遇のもので、やゝ小使が裕福になり、衣物に手が届きかゝる譯になるのであるが、實はこの第二に屬する所謂幸福な職業婦人が、自分が出來ると云ふので流行の着物をつくる爲に、外の出來ない人にまで、そのお洒落氣分をそゝつて行くと云ふ事實は、非常に多い。

斯くの如く職業婦人の收入は、少しお洒落をする

時には、親がかりでも衣物を買ふことさへ六ヶ敷い現狀なのに、事實は綺麗な着物が欲しい。否何かと工面して着飾つてゐるではないか。こゝに、彼の女等が貞操を虚榮の犧牲に供すと云ふ哀れむ可き結果が現はれてゐるのだ。されば我が國に於て、最近職業婦人の最低賃金を定めよと云ふ問題が叫ばれるのも當然の事である。

性を粗末にする者は自由を失ふ

前者の女の虚榮と云ふ問題以外に、生存費として四十二圓の標準收入が、果して德操と健康を維持するに足る賃金であるか何うかは疑問のある所で、今後婦人側からこれは大きな社會問題として鬪ふ可き事柄に屬するが、第二の性の關係に至つては、これは如何なる理由があらうと、如何な境遇の婦人であらうと、又男女の差別を問はず、性を粗末にする者は、却つて自由を失ふて仕舞ふものであると云ふ事は、斷言する。自由戀愛自由結婚は、戀愛の共產や亂婚雜婚を意味したのでは決してない。餘りに戀愛の思想を無視した日本では、戀の値打ちを高潮の餘り、戀愛至上主義まで唱へられたが、文字の示す通りあらゆる人生の他のものよりも戀愛が尊といといふ思想が成立する者でないことは自明の理だ。近代の甘い言葉に醉ふた若人が、如何に多く其の無分別さを後悔してゐる事だらう。

東京市內だけでも二十萬を數ふる我が愛する職業婦人よ。社會に訴ふ可き正しき權利の要求に持つ勇氣よりも、更に強い意志を以つて、貞操の誇だけは失はないで貰ひ度い。貞操を粗末にした男女の荒むでゆく事實は、餘り多く見せられてゐるではないか。

タイピストの集り

婦人タイピスト協會の總會が九月七日に帝國ホテルであつた。これから積極的に運動に力を入れやうといふのである。先きを急いではいけない。壹人でも余計に同じ道づれを得るやうにして着實に進んで行つてほしい。

憂鬱なる月

目次緋佐子

ひようぼうとして
はてもなくひろがり
寂寥と死滅の曠野を
肺病になやめる女の片頬か
それとも
片戀にやつれた男の心臟か
あてもなく
蒼々と月はさまよふ。

憂欝なるそのまゆをひそめて
細々と瘦せたるからだうちふるひ
頭たれ　頭たれ

音もなく流れる水底に
なやめるその姿をひそめ
むしばめる草叢に
うつそうと繁れる森の
古木のほらに、

黑々と陰欝なる影をのこして
なやましき夜を
蒼々と
月はすべるよ。

──一九二四、九、十一──

忍從、希望、解放

高倉晃太郎

眞夏の八月、熱苦しい水車場の中に、私は汗ばみながら臼から米をかき出してゐた。そして私は遠い日の記憶をたどつてゐるのだつた。

且て少年の日の私が、家の貧しい爲に、燃える樣に盛んな智識慾を抑へられて、小學校を終ると、暗い忍從と、おぼろげな未來に對する憧憬との交叉の中に、我と我が心を浮かせつ沈ませつ働いてゐたのはこの同じ水車場だつた。

父も母もみうちの人々もありとあらゆる私の周圍は『せつせと金を溜めろ』と私に敎へてくれた。私もその通りした。然しどうして幻滅が來ずにゐやうぞ、小學校を終つたばかしの馬鹿の私にもどうやら『おつつかぬ爲事』だと云ふことは判つた。その幻滅時代の私を本と先輩とが導いてくれた。『君の生活そのものゝ中に尊い意義、氣高い精神を見出せ』と少しく品のいゝところを私の先輩と本とは敎へてくれた。但し『生活はそのまゝで』あるのだ。私は本氣だつた。私は一生懸命『精神』を立派にすることを心がけた。私は苦闘した。本を讀んだ、歌を作ることも覺えた。そして、あきらめと忍從を歌つた。先輩の敎へてくれた通り、或は私の考へによつて新しい『商業道德』『商賣の神聖化』を計つた。客に嘘を言はぬこと、徹底的誠實――その他何々、これが綱領だつた。商業そのものが『分取主義』であり、徹頭徹尾虚僞と無誠實のかたまりである以上こんな馬鹿氣た綱領が實行出來ぬことは勿論であつた。商賣を一度でもやつたことのある人は經驗に

よつて知つてるだらう。

階級的對立を基本として居る現代社會に於いて、利潤を目的とする生産が基本である社會に於て、『商業道德』『商賣の神聖化』だの、または『精神の獨立』なんてことが實現出來る筈のないことはわかり切つたことだ。然しそれでも私は大眞面目にさう考へてゐたのだ。社會の組織そのものが缺陷に充ちてゐる以上、社會人の多數は『理屈より口が可愛いゝ』のである。私は馬鹿だつた。

然し私もだん／＼變つて來た、おぼろげな希望が遠い前方に望まれた。私は私の理性の權威以外の一切の傳統的權威の前に膝まづくことを拒む樣になつた。私の讀む本もちがつて來た。反逆の血が波立つた。

『精神の獨立』は私の過去へ投げ込んだ。私の精神を支配し、同時にすべての人の精神を支配するものは社會的生産關係であり、財産關係である。そしてこの上部構造の根底を衝くのが一切の根本的解決だ。

忍從、あきらめ、希望——斯うした樣々の惱みを經過して私は反逆の道へと急いだのであつた。

私は斯うした過去をふりかへつた。且ては斯うした考へをもつて働いた水車場の中に、今、私は汗ばみあえぎながら仕事をしてゐる。

反逆の道へ急いだものゝ、私は私の惱みが單に一個人の問題でなくてそれは現代の無産階級が抱く共通の惱みであり、そしてその解決は社會的であつてのみ、社會にとつても、亦私自身にとつてもの解決であることを知つたのだつた。

× × ×

私は過去と現在を對照しつゝ、不相變水車場の中に米をかい出してゐたことである。

少年の日の暗い忍從のかわりに、今は明るい解決の光を慕ひ乍ら。

これから——

開拓すべき婦人の新事業

婦人の職業市場では、近年小學校卒業と女學校卒業の經歷の差が、同志討ちをやつてゐるが、一の職業口を數人の求職者が爭ふやうになつた今日の職業熱からすれば、事情の許す婦人は新職業を開拓す可きであらう。今日本で、將來のある職業で、芽ばえかゝつてゐるものを二三紹介します。

婦人秘書　タイプライターが打てゝ速記が出來て、簿記が出來て、商業の事に明るくて常識があると云ふ條件で、今後銀行會社の重役の秘書に婦人を使ふ時が近づきました。現在では、星製藥株式會社に一人をります。丸の內の外語協會學校では、高女卒業程度の者を一日四時間宛稽古して一年間に仕上げるさうです。タイプ一つで幅をきかした時代から見れば大進歩だが、日本でも最高級のビヂネスウーマンとして、ここまで仕上る人がなければならぬ時が近づいてゐます。女子の高等商業學校が文部省の手で出來る時節ですから。

學校看護婦　これも文部省が、お茶の水女子高等師範の附屬小學校、に二名置いたのが最初で、各府縣でも小學校でだん〳〵置くやうになり、文部省でも奬勵してをります。今日までは赤十字看護婦がこの任務に選ばれてゐるやうです。この職業が全國的に開けて來れば、何萬人の學校看護婦が出來る譯です。

營養部長　この名は、市の社會局が直營小學校の生徒に、震災後營養食を與へるに就て生まれた營養係の名前で、今後全國の小學校、中學校、女學校、工場や病院等の大炊事場で、營養の問題が八釜ましくなれば無制限に殖えて來る職業です。話に聞けば、營養研究所の佐伯博士はこの問題に就て一歩を進めるさうです。

圖書館員　これも未だ、上野帝國

圖書館附屬の圖書館員養成所を出た婦人の數は十人前後で、從事してゐる人もほんの少數ですが、今後米國のやうに女六割男三割までは前途があるとしても、相半ばする所まで進んでゆけるかも知れません。

専門の婦人店員　店員は珍らしくない程澤山をりますが、今後は子供や婦人服を始め、音樂器、運動具、藥品等を始め、その商品に専門の知識のある者にかへると云ふ風習が出で、今後婦人店員は益々分化して行く事と思ひます。この方面に着眼して店員になるならば、興味は多い事でせう。

職業に就いての御相談に應じます

苟しくも、就職婦人は、今後事情の許す限りその人に適した職業を選ぶ必要があります。然し如何なる職業が何う開かれ、何う進んでゐるか、その現狀を知らないでは選擇することは出來ません。ソコデ本誌は、皆樣の職業選擇の相談相手としてこの欄を設けましたから、御遠慮なく利用して下さい。この欄の擔當者梅山氏は、早くから婦人職業に就いて研究と調査を進めてゐられるお方です。

▲質問者は必ず三錢切手封入のこと、

▲その代表的なものを、一般讀者の參考までに今後毎號誌上に掲載します。

職業婦人社内　婦人職業相談所

（擔當者　梅山一郎氏）

産褥

ともを

苦痛は刻々せまる
夫は妻の手を握り
妻は夫の手を握る
そして二人の心は怪しく震ふ
それは喜びであり恐れである
オ、産褥に呻く現代人は
しつかりと手を握れ

コスモポリタンの歌

安倍隆

此宵を旅寝の梅雨にしつとりとひたりてあればこゝろ靜けし
梅雨晴れに空たか〴〵と舞ひ遊び大きく輪がけるトビ一羽かも
南國のよせては返す汀邊にくろがねの子等かにとたはむる
目路はるか瀬戸内海をさしはさみ四國のくにかこゝろはおどる
ひそやかに忍び足して夏は來ぬ播州の山々みどりは深し
綠こき播州の山にも夏は來てこの旅の子やいづち行くらむ
ほがらかに播州の山々明け渡り大日輪は光りかゞやく
野にたちて播州の山々みつむれどこのさびしみやせんすべゞなし
山に明け山にくるゝ木曾のたびげにも信濃は山の國かや
みはるめにそこらエボタの木もはるか山もはるかに限りしられず
キラ〳〵と金色の光りかぎろひて斷層面に一と日は暮るゝ
我れなけば虫もててなく夜もすがらなくかとぞ思ふすゞ虫の聲

――一九二四、七、九日旅にて――

嵐の夜

藤木滋世

一

『もう一ヶ月丈」と云ふ、其の約束の一ヶ月もずん〳〵立つて行つた。母からは毎日の樣に歸國の日を迫つて來る。

「今あの田舍へ歸へつて行つたなら、もう當分上京することも出來まい。」

さう思ふと龍子は、何とも云へない淋しさが胸に込み上げて來て、堪えられない氣がした。

學校を中途で止さなくてはならない――その事も惜しい氣がした。好きな音樂の練習も出來なくなる――その事も悲しかつた。

しかし、もつと〳〵、龍子の心を暗くするものは、此の土地、東京を去ると云ふ事であつた。東京に對する强い執着であつた。

僅か二年と云ふ短かい日數ではあつたが、龍子にとつては、彼女が田舍で過した二十年にも增して、思出の多いものであつた。

本當の人間の社會、朧氣ながら人生と云ふ樣なものを知らせて吳れたのも此の土地であり、初戀の芽生を

育ぐくんで呉れたのも此の土地、又、失戀の悲しみを味はゝせてくれたのも此の土地であつた。

さう思つて來ると龍子は、其の二ヶ年の間の、いろ〳〵な出來事が、はつきり頭の中に浮んで來るのであつた。悲しいと思つた事も、今はもう悲しみではなかつた。腹立たしいと思つた事も、今は、腹も立たなかつた。何もかも、皆んな、なつかしい思出となつた。

母の一人居る田舍へ歸へつて行く日も、四五日の後に迫つたある日、龍子は書き終つた手紙をもう一度讀み返へして見た。

河田へ今、手紙を書くと云ふ事は、穩當でないとはよく分つて居た。

「愛を持つて居ない自分が、かうして今、彼に逢ふとする事は、一種の罪惡かも知れない、彼を益々深みに陷れる樣な結果になるだらうか。」

龍子はさう思つて、此の手紙を書く前にも、幾度か躊躇した。

しかし、彼の女は、今、東京を去ると云ふ淋しい心を、何かによつて慰められ度かつた。誰れでもよい、自分の心を聞いて貰ひ度かつた。二ヶ年の間に親しんだ總べての人に會つて、話して、それから歸り度かつた。

それに、もう一つ、杉野の消息を知るには、彼のたつた一人の親友である、河田に訊くより外ないと思つた。もう再び、逢ふことはないだらうと思はれる杉野ではあるが、國へ歸へる前に、是非、彼の消息丈は知り度いと思つた。彼の女は、思ひ切つて河田へ手紙を書いたのである。いよ〳〵投函した後も、彼の女はいろ〳〵に思ひ迷はずには居られなかつた。

杉野への手紙を、河田へ頼んだ時、彼がそれを、杉野へ渡してくれなかつた事を思ふと、今になつて、本當の杉野の事を話しては呉れないかも知れない、龍子はさうも思つて見た。だが、彼の其の時の心持は、龍子にも理解出來ると思つた。もし、反對の地位に自分が居たとしたならば、もつと〳〵ひどい事を、自分はして居たかも知れない、龍子にはさう考へられるのであつた。

龍子は今、河田のさうした行爲を、少しも責め樣とは思はなかつた。それが、戀するもの丶當　な行爲だと思はれた。龍子はむしろ、杉野の事を聞く爲に、彼をだしに使はふとして居る自分の、餘りにも圖々しさにあきれた。

二

烈しい亢奮を充分に制し樣として書いたらしい、河田の返事を見た時、

「あゝ、出さなければよかつた。」

と、龍子は後悔してももう追つ付かなかつた。

杉野の室で、龍子が話して居る時、河田はよく遊びに來た。遠慮がちに室の隅の椅子を寄せて、無關心らしく、幾枚も〳〵、一人で、レコードを掛けて居る彼の瞳が、時々、偸む樣に二人の上にそゝがれて居るのを、龍子は決して見逃がさなかつた。其の瞳の光りが龍子の頭には何時迄も殘つて居た。

龍子は今、河田の、其の燒け付く樣な瞳が、じつと自分の上にそゝがれて居る樣に感じて、思はず身顫ひした。

「たつたあれ丈の自分の手紙の文句が、之迄に、河田の心を亢奮させたのか。」

と思ふと、其の責任は充分に、自分に負はなくてはならないと思つた。

其の日は朝から少し曇り勝であつた。郊外へ出るのはどうかと危ぶまれたけれど、龍子は今日、どうしても、河田へ逢つておかなければならない様な氣がしたので、天候を氣遣ひながらも家を出た。

それにしても彼は來て居るだらうか、もし來て居なかつたら、……いゝえそんな事はあるまい、彼はそんな人をだしぬくやうな調子の男ではなかつた筈だ、――龍子は道々、多少の不安を覺えながら、山の手線の驛へ急いだ。

階段を下りて行きながらも、彼の女は敏こく構內へ目を配つた。彼らしい人を見出さうと思つたのである。

龍子がスーッと眞直ぐの向ふ迄目を通した時、待合室の入口の大時計の下に、紺の脊廣に黑のネクタイを小さく蝶型に結んだ、脊の高い青年が、じつとこちらを見て居るのを見出した。

「やつぱし彼は來て居た。」

さう想ふと彼の女は、急に胸がドキ〳〵として來るのを覺えた。譯もなく頰が熱くなつた。

「こんな筈ぢやないのに。」

彼の女は努めて冷靜に河田に近づいた。

河田は蒼白い面を上げて一寸會釋した。

「遠方へお誘ひして濟みませんでしたね。」

「いゝえ。」

龍子は輕るく答へて口をつぐんだ。

「貴女のお歸りになるのを僕ちつとも知りませんでした。」

河田はいやに眞面目な面をして龍子を見た。

「三月の休暇に歸へりました時、何もかも定めて參りましたの、母が一人になつて淋しいつて申しますから。」

「さう〳〵お父さんがお亡くなりになつたさうですね。」

父——と云はれると、すつかり覺悟はして居るもゝ、急に目の中が熱つくなる樣な氣がした。

二人が大森の驛に着いたのはお晝少し過ぎであつた。二人は直ぐ海岸の方へ出た。

其の頃から空模樣は段々に惡るくなつた。それに、少し風が出たので、潮の音が耳鳴りのやうに松林に聞えた。二人は當てなく其の邊をぶら〳〵と歩るいた。

どつちからも、お互ひに何か云ひ出さうとして居るらしかつたけれど、緒を切るにいゝ機會がなかつた。

結局二人は默し勝であつた。

しかし龍子は、今直ぐに杉野の事を云ひ出すのは、餘りに勝手過ぎると思はれた。俯つ向いて、ひどく考へ込んで居る河田の、その癖、もどかしい心をいら〳〵とさせて居る樣子が、並んで居る龍子には、彼の心臟のときめき迄讀める樣にはつきり感せられた。

彼の其の心に觸つてはいけない、之以上亢奮させてはいけないのだ——さう思つた龍子は、どうして其の緊張した沈默を破らうと迷つた。

「河田さん、此の頃もやつぱし、書の方をおやりになりますの。」

彼がちよい〳〵、油繪を描いて居た事を知つて居る龍子は、彼とは暫らく逢つて居なかつたので、そんな事を訊いた。

河田は初めてほつとした樣に頭を上げた。

「此の頃は全く駄目ですよ、それに餘り描き度くもありません。何しろ氣まぐれものですからね。」

彼は氣輕さうな調子で答へた。しかし、其の調子が如何にも貸り物の樣で、彼の心とぴつたり合つて居ないと龍子は思つた。

「でも、以前はよくお描きになりましたわね。」

「杉野が居た頃は僕もよく描きましたよ、しかし……」

さう云つて、急に不快さうに口をつぐんで終つた。

杉野――の言葉を聞いて、龍子は急に勢を得た樣に、

「さう〳〵、杉野さんからお便りありまして？」

「最近一度寄來しました。」

「あちらでやつぱし繪の研究をやつてらつしやるんですの。」

「さうらしいですよ。」

「ずつと伊太利へ滯在なさるんでせうか。」

「さあ、どうするでせうね、杉野の事ですから何處へぶらつくか分りませんよ。」

「何年位の御計畫なんでせう。」
此の機會に、成る丈多くの事を聞き正さうと、龍子は次から次へと質問を出した。しかし、河田の樣子は段々に變つて行く樣であつた。
「何時歸へるか分りませんね、自分では五年位の計畫で立つたんですが。」
「五年……」
龍子は口の中で呟やいて默つて終つた。
春の海とも思へない程の底暗い海面の彼方に、かもめが數羽、何かに驚ろいた樣に、羽音を立てゝ忙しく飛んだ。
二人の沈默は又續いた。
龍子と杉野とは、ほんの一寸した感情の行違ひから、さう〳〵、お互ひに離れた心を懷く樣になつて終つたのである。其の爲めに卒業をするとすぐ杉野は外國へ去つた。
彼が外國へ發つと云ふ事を聞いた龍子は、出發前に、一度彼に逢つて、快よく送り度いと思つた。その上で、彼の歸朝を待つ事も許して貰ひ度いと思つた。其の時龍子は、杉野への手紙を河田に托したのであつた。しかし、河田はそれを渡さなかつた。
そんな事や何かで、龍子は、杉野の出發の日も知らなければ、彼に逢ふ事さへも出來ないで別れて終つた。
もつとも、龍子の其の時の手紙の文句によつて、昔にかへる程、彼の心は純ではなかつた。彼は龍子との事件以來、短かい時日の間に、自棄的な、生活を知りつくして終つた。彼は最早、單なる戀愛を嬉ぶ人間で

はなくなつて居たのである。

ボートを乘り捨てゝ來たらしい、シャツ一枚の若い學生の群が、寮歌を高唱しながら、反對の方向から歸へつて來るのと出會つた。彼等は無遠慮に、二人をのぞき込んで、くすぐつたい笑を浮べた。

自分達を何と見たどらう――可成り落ち着いて、龍子はそんな事を想像して見た。そして、何の興味も持たない河田と、かうして歩るいて居る事が馬鹿らしかつた。

龍子は松の根元に一つの岩を見出して、一人、ずん〳〵其の方へ進んで行つた。海に向つて、彼の女は其處に腰掛けた。押し返へして來る潮の音と共に、生々しい海岸の匂ひがぷんと鼻を突く。

少し遲れた河田は、殊更らに彼の女に近付くのを避ける樣にして、波打ち際へ歩み寄つた。彼はステッキで、砂の上を二三回こつこつとかき廻した。そして、小石を拾つて、いくつも〳〵海面へ投げた。

彼は、いら〳〵した氣持をまぎらす樣に、俯つ向いて、二三間の間を往つたり來たりした。

龍子は彼のさうした樣子を、冷やかに觀察する樣な瞳で見守つた。

彼がいら〳〵として行けば行く程、龍子は反對に、冷靜に落ち着いて行つた。

彼の女はふと、彼に對するある優越感が、彼のその生々しい苦しみを、客觀的に味はつて見る快感を覺えて居る事に氣が付いた。彼の女は急に彼から瞳を反らした。

杉野の消息を聞くのが目的だつたにもせよ、河田の申出を容れて只二人、大森迄も出掛けて來たと云ふ、只それ丈けの事に對しても、河田に自分が、少しも好意を持つて居ない等と强辯する事は出來ない、さうしたなら自分は、彼の若しみに對して、どうしてやつたらいゝのか、龍子は考へずには居られなかつた。

やがて河田は、つか〳〵と龍子の傍らへ歩み寄つた。そして、彼の女の後の松の木に倚りかゝつた。

「何だか今日は變な天候ですね。」

「波の音迄荒んで居る樣ですね。」

龍子は何氣なく相槌を打つた。

「僕の現在を象徵して居る樣ですね。」

河田は大きく笑つたけれど、龍子は笑へなかつた。

「龍子さん此の海にもいよ〳〵お別れですね。」

彼はしんみりとした調子で云つた。

「僕はまだ貴女から委しい事は何も聞かなかつた樣ですが、何故又、田舍へひつこむ決心をなさつたんです。」

「何故つて、母一人では淋しいからですの。」

「お母さんも一緒にこちらへお出でになつたらいゝでせう。」

「いゝえ、母はとても東京へなんか參れませんわ。」

龍子は急に別れの淋しさを覺えた。

「僕休暇には遊びに行きますよ、かまひませんか。」

「えゝ、ちつとも、是非ゐらして下さい、私田舍へ歸へつたら、きつと淋しいだらうと思ひますの。」

龍子はつひ、引き入れられてそんな事迄饒舌つて終つた。

田舍では音樂會へも一寸行かれませんね。」
「それを思ふとたまらなく悲しい氣がしますの、でも私、音樂は一生捨てないつもりですわ。」
「貴女のステージ姿を一度も見ないで終ふのは殘念ですね。」
「ステーヂに立つなんて私、そんな事夢にも思つては居ませんでしたわ。」
龍子はそれを否定する樣に云つたけれど、其の實、彼の女の豐かな聲量は、未來に多くの囑望を持たれ、彼の女自身も、華やかな姿を空想しないではなかつた。しかし彼の女は、もうそんな事に憧れを持つては居なかつた。只、淋しい自分の心を慰めてくれるものとして、自分丈樂しむ音樂は、一生捨てまいと思つて居るのであつた。
學校を捨てゝ、音樂を捨てゝ、孤獨の田舍へ只一人、歸へるのだと思ふと、龍子は遣瀨ない淋しさに、誰にでもよろしい、しつかりと抱き附いて、思ふさま泣きたいやうな衝動を感ぜずには居られなかつた。
「河田さん、私淋しうございますわ。」
思ひ掛けなく手を採られた河田は、まじまじと龍子の顏を見入つた。
龍子は、發作的のさうした自分の態度に氣が付くと、急に身を引いて步るき出した。
「まあ私は、何を此の人に求め樣として居るのだらう。」
龍子は自分の心がなさけなくなつた。

三

天候は益々惡るくなつて來る。

海の上に二三片、薄墨の樣に動かなかつた雲が、だん〳〵に擴がつて、とう〳〵空一面を被つて終つた。時々、思ひ出した樣に、小粒な雨が、龍子の洋傘の上で、小さな音を立てた。

二人は何處迄も、何處迄も、海岸を歩るいて行つた。龍子も河田も、可成りくつたくのない氣持になる事が出來た。

龍子は時々、氣輕にカルメンを口ずさんだりした。さうして、お互ひの事には成る丈觸れまいとした。雨はとう〳〵降り出して來た。

河田は、自分が一度行つた事があると云ふ、ある小さな旅館に龍子を誘つた。其處で、兎に角、雨の止むのを待つ事にした。

二階の二間續きの小さい室に通された頃は、强い風と共に、雨雫がバラ〳〵と廊下に迄吹き入つた。

其の雨は夕になつても止まなかつた。それ所か、いよ〳〵强く、暴風雨となつて終つた。

龍子は氣が氣ではなかつた。閉め切つた雨戸を細目に開けては、氣遣はしさうに外を眺めた。此のまゝ止まないとしたならば、自動車でも賴むより外あるまい、と思つたりした。

河田と二人、今日一日を歩るいたと云ふ事丈でも、可成り强い呵責を自分自身に感じて居る彼の女として、此の上、此處に留まつてはいけないと思はれ出した。

河田は、彼の女のさうした心配には、少しの關はりもないものゝ樣に、幾本も、幾本も煙草を吸つた。割合に彼は沈着き拂つてゐたが、龍子が雨戸を閉めて元の座に歸へつた時、河田は哀願する樣に龍子の方へ顏を向けた。

「龍子さん……只一つ丈僕の願ひを訊いて下さいませんか。」

「えゝ……。」

龍子は彼の心の底迄も見透す様に、じつと相手の顔を見詰めた。

「今晩、此處へ泊つて下さい、決して貴女の迷惑になる樣な事はしません、聞き度い事も、聞いて頂き度い事も、僕には澤山あるんです。」

眞面目な彼の顏の何處にも、輕薄らしい影は見えなかつた。

「僕を信じて下さい。」

彼の瞳はうるんで居た。

龍子はうな垂れて、默したまゝ、答へなかつた。

日はもうとつくに暮れて、勢を得た雨と風は、益々荒れ狂つた。

龍子には、どんな場合にも、自分を守り得る强い自信があつた。其の自信は、彼の女が、此の場合、河田と對座すると云ふ事に對しても、充分に心の安易さを感じさせてくれた。

「一般道德から見たならば充分に非難さるべき事に違ひない、しかし、自分自身に慰められるものがあるならばちつともかまはない。恥づべき事にはならない。」

さうした考へが、冷やゝかな龍子の頭に浮び上つて來た。彼の女の心がさう決して來ると、先程迄の不安は跡かたもなく消えて、却つて氣輕るに平氣で河田に向ふ事が出來た。

河田も、晝間の樣な怯づ〳〵した態度でなく、しんみりと杉野の事等話して呉れた。

龍子は初めて彼の口から、昨年の秋以來の杉野の樣子を委しく知る事が出來た。「戀の常習犯」、杉野が自分をさう云つて非難したと云ふ事を聞いても、凡ては誤解が基だつた事を知つた龍子は、別に悲しいとは思はなかつた。無論、其の爲めに、杉野を憎む樣な氣にはなれなかつた。

「それで龍子さんは之から先、どうなさるつもりです？」

「私何時迄も待ちます、杉野の歸へつて來る迄待ちます。」

きつぱりと云ひ切つた。

「しかし、去つて行く者を追つた所で仕樣がないじやありませんか。」

「いゝえ、そんな事問題にはなりません。私は只待つて居ればいゝのです。」

「何時歸つて來るか分らない杉野を？」

「私一生でも待つつもりですわ。」

龍子は俯つ向いたまゝで居た。しかし、河田の顏が、眞蒼になつた事を感じた。

「では……では僕はもう……」

河田は急に立ち上つた。そして、ふら〳〵と雨戸を開けた。雨のしぶきが風に混じつて、石の樣に、座つたまゝ動かない龍子の顏を打つた。

龍子は其の時、自分自身の姿を、河田に於てはつきりと見る氣がした。

其の夜龍子は、次の室で、河田のかすかなうめきを聞きながら、夜通し寢床の中へは入らなかつた。

（完）

原稿募集

【論　文】十五枚位（四百字詰）
【時事批判】長短隨意
【創　作】二十枚位（同　前）
【感想文】詩歌、其他飜譯など
締　切（毎月五日）
宛名は、職業婦人社內
「婦人と勞働」編輯部へ

誌代、賛助費の拂込に就いて
前金講讀の實行

十月號の發送と同時に、未拂の誌代、賛助費の請求書を送りましたから、どうぞ早速拂込んで下さい。何しろ、みんな片手に職業を持つた上でやつてゐる仕事ですから、手不足です。みなさんに於ても、出來るだけ私達の余計な勞力が省けるやうにお心添下さい。やむをえぬ方々だけ、後より集金郵便を差出すことにしますが、御存じの通り集金郵便は、うける方も差出す方も愉快でない上に、一口八錢といふ手數料をとられるし、二圓以上でないと取扱はないのできはめて不便です。なほ、この際、全部前金購讀にしたいと思ひますから、以後前金切の場合はすぐ拂込んで下さい。

△編輯室より▽

○地方の婦人界も近頃では余程世の中に觸れた仕事をするやうになつて來たやうです。然し三人や五人や二十人の婦人が、高い處からがや〳〵云つたんでは駄目です。全ての婦人の、全體としての婦人のレベルをもう少し引上げるために、私たちは努めなくてはならないのです。あなたはあなたの立場から、私は私の立場から、みんな與へられたその部所々々からかためてゆきませう。

○あなた方の日常生活の上にかず〳〵湧いて出るそのなやみ、その不滿、それはあなた一人の不平や惱みでは決してありません。それらは、今のやうな社會では、婦人全體が共通に持つものであります。私たちは、それらを怠慢の中にうちやつておかないで、それらの不平や、惱みやの中から、私たちの正しい存在を見出してゆかればならないと思ひます。

○來月號から、雜誌の編輯振りを思ひ切り改めて、かれて自分の理想として胸に描いてゐるやうな、面白くつて而も刺戟に富み、研究にも、報告にもなつて、その上、未だ世に現はれない多くのすぐれた女の人たちの作品や研究やを發表して、大いに女性の意氣を世に問ふやうなものにしやうと、着々準備を急いでゐます。どうぞみなさんも、無產階級の私たち婦人が、かういふ機關を持つてゐるといふ事が、私たちの誇りでもあり、喜びでもあるやうな、いゝ雜誌が出來るやうに、力をかして下さい、是非、原稿もほしいし、一人でも餘計に愛讀者を得る事にも、お骨折り頂きたいと思ひます。（奥）

定價			
一部	金三十錢	郵税五厘
半ケ年	金一圓八十錢	不要
一ケ年	金三圓六十錢	不要

廣告料		
特等	一頁	四十圓
一等	一頁	三十圓
二等	一頁	二十圓
	半頁	十圓

四回以上割引あり

御注文は總て前金で願ひます。
御送金は振替に御拂込み下さい。
郵劵代用の際は一割增の事（一錢又は五厘切手にて）
誌代の領收書は別に差上げません
雜誌發送を以つてこれにかへます

大正十三年八月廿九日印刷納本　第二卷
大正十三年九月一日發行　第五號
東京市外巢鴨町一〇一九
編輯發行人
印刷人　奥むめお
東谷市外下澁谷五三三
印刷所　株式會社弘榮社
東京市外巢鴨町一〇一九
發行所「婦人と勞働」職業婦人社
振替東京六四一六〇


ホシ胃腸藥
胃腸氣痛藥
ホシ胃腸藥
星標胃腸藥
호시위장약
二十錢
五十錢
一圓
二圓

大正十三年九月二十九日印刷納本
大正十三年十月一日發行

婦人と勞働 第二卷第六號

定價金參拾錢

職業婦人社發行

